



業務DXの目的

デジタル技術を活用して業務を効率化し、企業のマネジメントレベルを変革することで「収益性・生産性の向上」と「持続的な成長」を実現します。これは単なるIT化ではなく、経営戦略そのものの進化です。

業務DXの3つの着眼点



① KPIの明確化と事業の見える化

社員が20人を超えると、マネジメントの仕組みが必要になります。

KPI(重要業績指標)を設定し、数値で課題を把握することで、原因を特定し具体的な改善策を実行できるようになります。



② 手作業・手入力のシステム化

定型業務にExcelを使うことをやめ、システム化で効率化します。手入力や紙の文化を脱却し、データを一元管理することで、作業時間を大幅に削減できます。



③ 業務の標準化とシステム化による競争力強化

業務を標準化し、スケール拡大に対応できる仕組みをつくります。効率性・管理性・品質を安定させ、それを競争力に変えていくことが重要です。

KPIによる事業の「見える化」例

実装ステップ

01

管理の仕組み変革

社員20人を超えると管理の仕組みが変わります

02

KPI設定

業績を「見える化」するための指標を設定

03

原因特定と改善

数値から原因を特定し、改善策を実行

04

継続的管理

業務プロセスの中でKPIを継続的に管理

具体的な活用例

売上未達の場合

エリア別・商品別の売上データで原因を特定し、注力すべき領域を明確化します

粗利益率が低い場合

案件別・担当者別の粗利表で生産性を可視化し、改善ポイントを洗い出します

KPIをもとに「誰の」「どの案件」が課題かを正確に把握できるようになります。

事例:健康診断業(企業訪問型)

背景

健診バスで企業を訪問し、医師・看護師・技師などを外部手配。同じ顧客を毎年巡回する事業モデルでしたが、業務が紙中心で効率が悪く、改善意識も低い状態でした。

導入前の課題

- 紙・Excel中心で二重・三重入力が発生
- 不採算案件を受注していた
- 業務ルールが不明確で属人化
- コスト管理ができていない

DXによる解決策

- クラウドシステムを導入し業務フローを整理
- 受注から精算まで一元管理
- 勤務実績やコストをリアルタイムで可視化
- 業務を標準化し、マニュアル化

導入効果

50%

人件費削減

ムダな作業を大幅削減し、人件費が約半減

100%

損益可視化

予定段階で損益を把握し、赤字案件を排除

標準化

業務標準化

誰でも対応可能な仕組みを構築

定着

改善サイクル

KPIが見える化し、PDCAが定着



まとめ



見える化

KPIで現状を数値化



標準化

業務プロセスを整理



収益化

生産性と競争力を向上

業務DXとは単なるシステム導入ではなく、「見える化 → 標準化 → 収益化」という経営変革のプロセスです。デジタル技術を軸に、組織全体の生産性と競争力を高めることが真の目的なのです。